

志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について(Ⅱ)

柴 垣 勇 夫

はじめに

窑窯末期に出現する志戸呂窯の施釉陶器生産は、16世紀に入ると、一端途絶えながら、後半代の大窯Ⅲ期に至って再び瀬戸・美濃地方からの陶工の移動ないし技術移入によって再開される。その中心的な生産窯跡である上志戸呂窯灰原出土資料をもとに、その後の志戸呂窯横岡地区窯跡採集品を加え、志戸呂窯製品生産の推移を「天目茶碗」という比較的明瞭な形態変遷をみせる器種の特徴から眺めてみた。その様相は、ほぼ17世紀いっぱい、継続的に生産が行われていたことを推定させたのであるが、このことのもつ意味は、大窯期から連房式登窯期への連続的生産が、上志戸呂窯から横岡地区の窯跡へ引継がれていくことを示すということであった。^(注1)

美濃窯においては、大窯Ⅰ～Ⅴ期・登窯各期へと、施釉陶器の継続的生産が行われていくが、^(注2)瀬戸窯においては、大窯Ⅲ期までの生産がみられて以後、一時途絶えて、いわゆる瀬戸山離散という現象を示し、再び生産が開始されるのは、17世紀へ入ってからであった。そこでは、大窯形態の窯体構造が引き続き採用され、連房式登窯が採用されてのちもなお、使用されていたことが明らかにされている。施釉陶器生産の一大中心地での生産形態の推移が、東濃地区(美濃窯)と瀬戸地区(瀬戸窯)で大きく異なる現象があるのに対し、果して、志戸呂窯窯業生産は、美濃窯と同様な継続的生産形態をとっていたのであろうか。天目茶碗でみると、ほぼ途絶えることなく、形態的には、美濃窯と同様な傾向をみせながら変移していくことを推定させた。他器種においても、同様な変遷過程を明らかにしていくことが、この傾向の実証につながることであるが、上志戸呂窯における遺物整理の中で、今回は、小天目茶碗の変化を抽出できたので、ここにとりあえず報告することとした。

1. 上志戸呂窯の小天目茶碗

小天目茶碗は、瀬戸窯においては、いわゆる古瀬戸後期より出現し、本業4期まで生産が続くようである。そして、この天目型もまた、天目茶碗の形態変遷と同様な変化をたどる。^(注4)

上志戸呂窯での小天目茶碗には、天目茶碗でみたと同様な形態分類をすることが可能であり、この様相が先にみた推定をより肉付けするものになるように思われる。以下にその形態分類を眺めてみることにする。

(1) 小天目茶碗の出土量

上志戸呂窯において整理分類した遺物8100片の遺物中、天目茶碗は、約160片であるが、凶化できた主要なものは、32点を数える。これに対し、小天目茶碗は、総数19片、内1片が灰釉で、^(注6)他はすべて鉄釉である。凶化できた資料は、灰釉1点、鉄釉12点の合計13点である。^(注7)

出土遺物全体の中に天目茶碗の占める割合は、約2%で、天目茶碗と小天目茶碗との生産比率は、1:0.118であった。

これを瀬戸窯と比較してみると、大窯Ⅲ期にあたる月山窯では、まず、総遺物量(4340片)に対して天目茶碗(1729片)の占める割合は、40%で、天目茶碗の生産量の多さが目につく。この1729片中の24片が小天目茶碗で、天目茶碗と小天目茶碗の生産比率は、1:0.014である。^(注8)

一方、美濃窯の例として同じく大窯Ⅲ期の尼ヶ根1号窯での遺物量をみると、まず総遺物量

(3602片)に対して、天目茶碗(526片)の占める割合は、14.6%で、月山窯の $\frac{1}{3}$ 程度の生産量である。小天目茶碗は、小坏87片中に含まれているが、そのうち10点が小天目型とされているところから、天目茶碗と小天目茶碗の生産比率は、1:0.019であった。^(注9)なお、10点の小天目茶碗は、すべて鉄釉であるが、そのほか、1点のみ体部片で灰釉片があるとされており、尼ヶ根1号窯でも灰釉小天目茶碗が生産されていたことが知られる。

この3つの窯業地の比較は時間的な生産期間と、供給対象の違いなどを考慮にいれなければ必ずしも同一条件下での比較ということにはならないが、焼成器種の地域的な生産傾向としての特徴を全体量との比較から読みとることは可能であろう。とすれば、上志戸呂窯での天目茶碗の生産量は極めて低いとみなければならない。しかし、その天目茶碗の形態差が多いことや、小天目茶碗の生産量は、瀬戸・美濃窯に比べ8~10倍の高さを占めていることは、あるいは注文生産された物ではなかったかという感をもたせるものである。天目茶碗の数量に対する種類の多さとも関連して、上志戸呂窯の天目茶碗、小天目茶碗が検討に価するものであると考える由縁である。

(2) 小天目茶碗の分類

第1図に図示した小天目茶碗13点は、すべて、上志戸呂窯灰原出土資料であるが、No.3のみが、発掘区西部地区出土で、他の12点は東部地区出土である。

これらは、口縁形態および器形プロポーションから、3種類に分類することができる。

○小天目茶碗第1類(第1図1~3)

口縁部を、玉縁状に脹らませた形態のもので天目茶碗1類と同様に胴上半部が球形状に作られている。また、器高はやや低く、全体に扁平な感じをもたせる。

No.1は、口径8.2cm、高さ推定3.1cmの大きさを示す小片であるが、内外面ともに天目茶碗と同様な鉄釉(黒褐色の発色で光沢をもつ)が掛けられており、口唇部全体および、胴上半はいわゆる飴色を呈している。

No.2は、口唇部が玉縁状にならないが、胴上半が球状に彎曲するもので、口径9.0cm、高さ推定3.6cmを測る。鉄釉がまだ熔けずに茶褐色の失透状を呈している。No.1と同様なやや扁平な器形である。

No.3は、内外にやや暗い黄緑色の灰釉のかけられたもので、小天目では唯一の例である。口径(推定)7.8cm、高さ(推定)3.7cm、底径3.5cmの大きさで、高台部は輪高台ではなく、内反り高台である。小天目茶碗における内反り高台は、この1点のみである。胴部は、球状で、やや高さを増しているため扁平な感じはあまりない。

このグループには、錆釉をあらかじめ鉄釉下に塗っているものはないが、次の第2類の中には、それが目立つ。灰釉小天目にみられる内反り高台は、No.3が唯一の出土例であるが、造作といい、釉掛けの範囲といい、鉄釉の小天目茶碗とほとんど変わらない。

○小天目茶碗第2類(第1図4~10)

No.4は、口唇部を若干玉縁状に膨ませたものだが、胴部の彎曲線がやや直線的になったもので1類に比べ胴上半の屈曲部の脹らみが小さい。口径8.0cm、高さ3.7cm、底径3.2cmを測り、鉄釉が不透明な茶褐色の発色を見せている。高台は輪高台。

No.5は、口唇部の脹らみがなく逆「八」の字に直線的に開く口縁で、胴下半部も丸味がなくなりつつある形態を示す。口径7.8cm、高さ3.5cm、底径(推定)3.5cmを測るもので、鉄釉が外面

胴上半から内面全体に掛けられている。釉は発色せず錆釉の如きこげ茶色を呈している。化粧掛けははなく、胴下半から底部は露胎である。高台は輪高台である。

No. 6は、口唇部を薄く仕上げ、更に逆「八」の字状に上方へ引上げた器形で、胴上半の丸味も少ない。No. 5に比べやや大きいのが、ほぼ、規格化された大きさがあつたかのである。口径 8.6 cm、高さ 4.0 cm、底径 4.0 cmを測る。鉄釉は発色せず失透性の黄褐色～茶褐色を呈しているが、素地は堅く焼けている。高台は輪高台で、畳付け外周にもヘラケズリが細かく入り、丁寧なケズリが行われている。

No. 7は、口唇部が外方へ直線的に広がる逆「八」の字形を示し、胴下半も角ばっている。高台は、輪高台を削り出しているが、丁寧な削りが行われている。口径 8.4 cm、高さ 3.9 cm、底径 3.6 cmを測る。釉は熔けずに黄褐色の失透性の釉薬が内面全体と外面胴中央や下にまでかかっている。

No. 8は、内外とも全面に錆釉が化粧掛けされていて、口縁寄りの内外面には、更に鉄釉（錆釉を全面に掛けた後、口縁部位に2度掛けしたと思われる）が掛けられ、部分的に釉が垂下しているのが認められる。口径 8.6 cm、高さ 3.7 cm、底径 3.8 cmの大きさで、輪高台は、丁寧に削り出されている。

No. 9は、No. 8と同様、全面に錆釉が化粧掛けされているもので、やはり口縁寄りの内外面に鉄釉（錆釉の二度掛け）が掛けられ、部分的に釉が垂下している。焼成中の事故によるのか破片にひずみがあり、実際よりも口径が短かく、高さが高い実測図となった。口径 7.1 cm、高さ 4.3 cm、底径 3.6 cmを測るが、ひずみがなければ、ほぼNo. 8と同規模であつたと思われる。口唇部は、若干玉縁状の脹らみをもつが胴下半は割に直線的である。

No. 10は、口唇部が外方へうすく引き上げられたものだが、No. 4～8ほど外方へ開かない。口縁部の下、胴上半部にみられる、天目茶碗特有の段がやや下位に作られ、全体として巾広な段部を作り出している。口径 7.5 cm、高さ 3.5 cm、底径 3.7 cmを測る。高台は輪高台を丁寧に削り出している。鉄釉は黒褐色に発色して天目特有の光沢を放つ。

これらのグループは、No. 10を除き、ほぼ同一規格の小碗で、高台削りも丁寧である。No. 10は、次の第3類との中間型であるが、胴部の彎曲線は比較的直線的で、2類のものと類似するので、2類に包括させた。

○小天目茶碗第3類（第1図11～13）

No. 11は、口唇部をうすくつまみ出し曲線的に外反させているタイプのもので、胴上半部の屈曲部の段（胴下半部への外形線の変換点）の位置が第1・2類よりも下がり、かつ垂直的な段を形成している。口径 7.6 cm、高さ 3.5 cm、底径 3.2 cmとややこぶりである。鉄釉は発色せず、灰が混じつたのか暗い黄緑色の失透性の調子となっている。高台は輪高台を削り出しているが、第1・2類より丁寧ではなく、高台畳付けの巾が不均等にしかも粘土のはみ出しを取り除かないまま焼成している。

No. 12は、口径 8.6 cm、高さ 3.8 cm、底径 4.2 cmで、No. 11より一まわり大きい。しかし口唇部の作り、胴上半部の段の位置、高台の成形の様子などほとんど同じで、外形断面も極めてよく類似している。鉄釉は、発色せず、暗い黄褐色の失透性の釉調となっている。

No. 13は、底部片であるが、高台周辺の成形の様子や胴下半の外形断面は、No. 11. 12と同様である。鉄釉は部分的に黒褐色の光沢ある釉調をみせている。底径 3.5 cmを測る。

(3) 小天目茶碗の特徴

この第1～3類は、天目茶碗の外形が球形で口唇部が「八」の字に開くタイプのものから、胴部が

	窯名	出土地	法量			口縁 残存率(%)	釉薬	高台	分類	備考
			口径	高さ	底径					
1	上志戸呂	E8下層	8.2	(推)3.1	—	15	鉄	a 削り	第1類	(天目Ⅰ類)
2	"	E8上層	9.0	(推)3.6	—	20	"	a "	"	"
3	"	F4下層	(推)7.6	(推)3.7	3.5	0	灰	b "	"	胴以下50% "
4	"	F8上層	8.0	3.7	3.2	25	鉄	a "	第2類	"
5	"	F9下層	7.8	3.5	(推)3.5	15	"	a "	"	"
6	"	E8上層	8.6	4.0	4.0	20	"	a "	"	"
7	"	E8上層	8.4	3.9	3.6	15	"	a "	"	"
8	"	F9下層	8.6	3.7	3.8	15	鉄・錆	a "	"	"
9	"	F9下層	7.1	4.3	3.6	15	"	a "	"	ひずみ大 "
10	"	E8上層	7.5	3.5	3.7	30	鉄	a "	"	(天目Ⅱ類)
11	"	不明	7.6	3.5	3.2	30	"	a "	第3類	(天目Ⅰ類)
12	"	E8上層	8.6	3.8	4.2	25	"	a "	"	"
13	"	E8上層	—	—	3.5	0	"	a "	"	底部100% "
14	初山	/	7.5	4.0	3.2	15	"	a "	第1類	細江町宝林寺 "
15	神座瓶山	/	8.6	4.1	3.8	90	"	a "	第3類	島田市(天目Ⅱ類)

表1 上志戸呂窯および周辺窯の小天目茶碗計測表

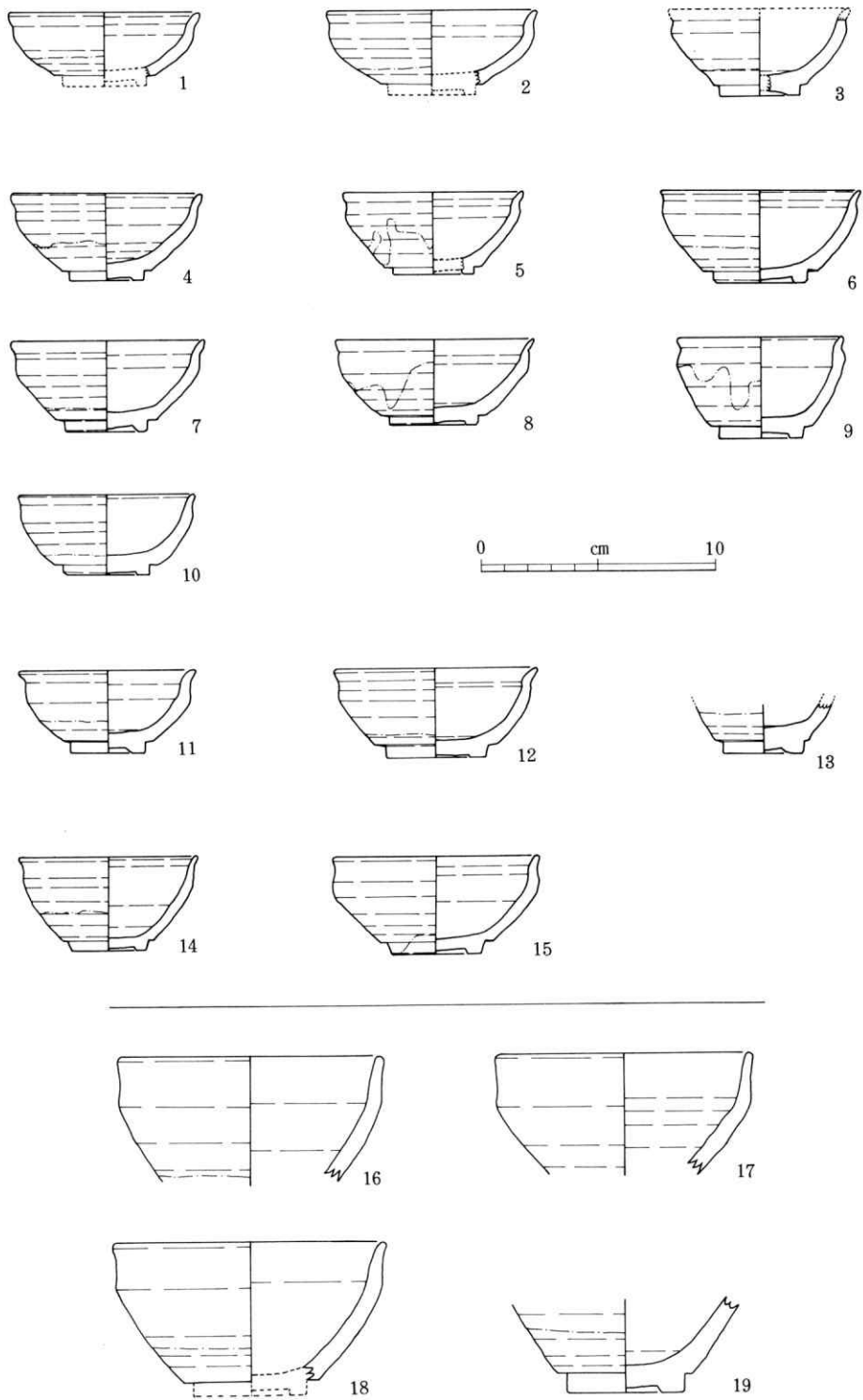
丸味をなくし、直線的な器形をとり、かつ口縁部が直立するタイプへと変貌を遂げると同様な器形変化をみせているものと判断される。しかし窖窯末期から大窯期をとおして観察される天目茶碗の口縁形態の2種の差、すなわち天目茶碗Ⅰ類(口唇部を外反させ先端を尖らせるタイプ)、天目茶碗Ⅱ類(体部から口縁への移行を垂直的に曲げ、やや内彎気味からわずかに外反させて丸味をもつ口唇部とするタイプ)の差は、この小天目茶碗の中にみられず、わずかにNo.10にⅡ類らしき特徴をみるのみで、すべてⅠ類の形態をとるものばかりであった。^(注10)

しかし、No.10～11の口縁形態は、天目茶碗Ⅱ類の雰囲気をもったもので、あるいはⅡ類の形を意識したものであったのかもしれない。いずれにしても全体的に小天目茶碗の形は天目茶碗Ⅰ類を小型化したものが基本形であったようで、口唇部先端を尖らせ外反気味に作っていること、胴上半部が屈曲ない段をなしていることを大きな特徴としている。そして、大きさに一定の規格があって、それに沿うようにほぼ同じ大きさのものが作られたようで、第1類から第3類まで、胴上半の段部の直径に差をみせながら、口径8.0cm前後、器高4.0cm前後、底径3.5cm前後と似かよった数値をみせている。なお、新たに実測した上志戸呂窯天目茶碗第6類に所属する資料を4点追加する(第1図16～19)が、形態的に小天目茶碗第3類に似る。

小天目茶碗は、志戸呂窯の中では、上志戸呂窯での出土があるのみであるが、大窯期の施釉陶器を生産した窯業地に若干の小天目茶碗の出土例があるので、次にこれを眺めてみよう。

2. 周辺古窯跡出土の小天目茶碗

上志戸呂窯と同様な大窯期の施釉陶器生産窯として知られるものに、浜名湖の北、静岡県引佐郡細江町石岡から中川に分布する初山焼(窯)がある。このうち細江町教育委員会が灰原を調査した釜下窯と、初山の名称の起りになっている初山宝林寺にある宝林寺境内窯の2か所から小天目茶碗が出土し



第1図 上志戸呂窯および周辺窯出土 小天目茶碗等

- 1~13. 上志戸呂窯出土品。
 14. 初山宝林寺窯出土品。
 15. 島田市神座瓶山窯出土品。
 16~19. 上志戸呂窯出土天目茶碗。
 (上志戸呂Ⅲ期)

ている。また、静岡県を駿河地方と遠州地方とに分ける大井川を挟んで、西の榛原郡金谷町志戸呂地区と相対する東側の島田市神座地区にも志戸呂窯の分枝と見られる施釉陶器窯が所在するが、このうちの神座瓶山窯からも小天目茶碗の出土が知られる。これらの例の特徴をみでみる。

(1) 初山窯出土の小天目茶碗

釜下窯では、口縁から胴下半までの破片が出土しているが、口径 7.6 cm、推定器高 3.6 cm、推定底径 3.0 cm の大きさで鉄釉が施されている。報告書では杯 A としているものである。^(注11)高さ、底径は、実測図からの推定であるが、底径がやや小さい点を除けば、上志戸呂窯出土の小天目茶碗第 2 類に類似している。器形的には No.10 に酷似するが、口唇部の外反度と引き上げ状況が釜下窯の方が強いようである。

初山宝林寺境内窯出土の資料(第 1 図-14)は、口径 7.5 cm、器高 4.0 cm、底径 3.2 cm の大きさで、口径に対し器高の大きい形状を示している。^(注12)鉄釉も黒褐色に発色し、高台の輪高台を削り出す作業も丁寧である。なお、胴下半は、上志戸呂窯の製品と同様、ヘラ削り仕上げがなされている。器壁が全体に薄く作られ、口唇部を玉縁状に脹らます点や逆「八」の字の外反度は上志戸呂窯の小天目茶碗第 1 類よりも小さく、やや古い様相を示している。後述する瀬戸市昔田窯など大窯Ⅱ期に編年されるタイプの小天目茶碗に類似している。しかし、初山宝林寺境内窯から採集されている天目茶碗、丸皿、小杯等の製品は、上志戸呂窯で出土している古い様相のものときほど変わりはない。したがって、この小天目茶碗も大窯Ⅲ期と編年されるグループの製品とみられる。

(2) 神座瓶山窯出土の小天目茶碗

この窯は上志戸呂窯とほぼ同時期の施釉陶器を生産していた大井川東岸の丘陵西麓の古窯跡であるが、桃山期の上志戸呂窯から北へ 3.5 km、江戸期の横岡釜谷地区の窯跡群から北 2 km の、大井川を越した島田市神座に位置する。文化・文政年間の地誌『掛川誌稿』には、「志戸呂の陶器は尾州瀬戸の陶工、初めこの里に來り造せしより志戸呂焼と稱す。天正 16 年御朱印を給はり、夫より相續いて焼く。又相賀、神座の二村に移り、又此村に移り、初め竈谷の段にて焼き後、村の脇に竈を造り焼く」とあって、神座のほか、相賀にも窯が築かれたと記している。相賀は同じく島田市内で神座の東 2.5 km の谷あいの集落で、窯跡が北側丘陵斜面にあるというが、内容はまだ明らかになっていない。しかし、志戸呂窯と同一の生産圏を作っていた窯業地であることに違いはない。神座瓶山窯(島田市神座字嵐口)では、昭和 45 年頃道路工事によって遺物が出土し、天目茶碗、半筒茶碗、丸皿、播鉢、水注、茶入、輪花皿などと共に小天目茶碗が採集されている。この資料(第 1 図 No.15)は、焼成がやや生焼け状態のものだが、全体器形をよく残している。^(注13)口径 8.6 cm、器高 4.1 cm、底径 3.8 cm の大きさで、上志戸呂窯出土の小天目茶碗とほぼ同規模の数値を示すが、口唇部はあまり外反せず、胴上半部の段(屈曲部)がやや下位にあることから、上志戸呂窯小天目茶碗第 3 類に類似するものとみることができ、鉄釉は発色が悪く、不透明な濃紫色となり、光沢もない。胴下半はヘラ削りされ、高台脇以下が露胎となっている。上志戸呂窯焼成品との比較を各器種について行う必要があるが、現況では、上志戸呂窯の焼成期間の後半期と重なりあうのではないかと考えられる。

以上、大窯焼成段階での小天目茶碗の形態的な差を上志戸呂窯製品と初山窯、神座瓶山窯製品から眺めてみた。この器種にみる形態差は、ほぼ時間的な差とみることができ、先にみた天目茶碗の形態的変遷と同一の歩調を歩いたものと考えられよう。^(注14)

これらの時代的な位置付けは、瀬戸・美濃窯における大窯編年のうちの大窯Ⅲ～Ⅴ期に置かれる。^(注15)

さて、小天目茶碗は、何時頃発生し、何時頃衰退していくのであろう。志戸呂窯では、窖窯末期の三ツ沢窯があるが、現在のところここでは小天目茶碗は見つかっていない。大窯Ⅲ期以後に置かれる上志戸呂窯では、20点近くの陶片（小天目茶碗1～3類）が出土しており、同じ志戸呂窯跡群に包含される神座瓶山窯では3点ほど採集され、いずれも小天目茶碗第3類のものであった。その後築窯される志戸呂・横岡釜谷地区では、これまでのところ、採集されていない。江戸時代前期の遺物の多い釜谷南窯や新兵衛窯、内藤窯では、小碗タイプの陶片が採集されているが、ここにみえてきた、小天目茶碗のタイプはみつからない。しかし、瀬戸窯では、尾呂窯の調査によって、ほぼ17世紀後半代までで存続していることが明らかとなっており、18世紀代には姿を消す^(注16)ことが知られている。したがって、志戸呂窯でも17世紀代に生産していた可能性は極めて高い。

そこで、瀬戸窯における小天目茶碗の器形変化を追ってみることにする。

3. 瀬戸窯における小天目茶碗の変遷

窖窯末期、いわゆる古瀬戸後期の第Ⅱ期^(注17)に天目茶碗の形態に2種類の器形が生まれ、製作され出したころ、小天目茶碗が瀬戸窯の中で製作され出した（典型例として著名な小長曾窯がある）。ほぼ15世紀中葉からはじまり、尾呂窯の盛期まで、2世紀半にわたって生産されたが、以下にその特徴をかいつまんで述べてみよう。

(1) 古瀬戸後期段階（窖窯末期）

小長曾窯出土例にみるように、すでに一定の規格をもって生まれたようで、大窯Ⅰ期およびⅡ期の時期にみられる大きさとはほぼ同一の製品が誕生している。第2図No.1は、採集品であるが、黒褐色の光沢のある発色を示す小天目茶碗で、全面に薄く錆釉が塗られた上に内面全面と外面胴下半から上部に鉄釉が掛けられている。素地も緻密なもので、球形の、いわゆる天目型を整美に作り出している。口唇部は小さくかつ薄く外反気味に引き上げている。第2図-2も同様な例である。

古瀬戸後期第Ⅲ期（後Ⅲ期という）とされる山口八幡2・3号窯^(注19)や、最初の施釉陶器窯の拡散期にあたり瀬戸市の隣町、藤岡町に築窯された、笹窯^(注20)では、天目茶碗Ⅱ類（口縁部が直立し、器形断面が矩形を呈する形）が明瞭に登場するが、このⅡ類の形状に酷似した小天目茶碗が作られている（第2図3・4）。こうした器形が作られるのは、この時期のみである。おそらく、天目茶碗Ⅰ類が存在することから小長曾窯で出現した小天目茶碗の形態は、この期にも存在し、製作されたと思われるが、Ⅱ類の形態を模倣した扁平な小天目茶碗が多く製作されたようで、山口八幡2号窯、笹窯ともに、口径のやや大きな扁平な小天目茶碗が目立つ。

窖窯最末期の古瀬戸後期第Ⅳ期（後Ⅳ期）の標式窯である菊畑窯^(注21)では、小天目茶碗の例が発見されていないが、鉄釉掛けの台付小杯（仏餉具）が数例出土している。これは、平碗型の小杯と托が一緒になって同一個体に作りあげられているものだが、用途としては、小天目茶碗と同じように特殊な喫茶具ないし仏餉具として製作されたものではないかと推定される。中に口縁部を天目型のように屈曲させるものがあり、胴下半の屈曲も小天目茶碗型に作るものがある。こうした例から類推して、菊畑窯段階には、再び小長曾窯の時期と同様の天目茶碗Ⅰ類の器形に類する小天目茶碗が製作されていたものと推定される。

(2) 大窯期段階

大窯Ⅰ期に編年される小金山窯^(注22)では、第2図5にみるように、球形に脹らむ胴部に、逆「八」の字に

さて、小天目茶碗は、何時頃発生し、何時頃衰退していくのであろう。志戸呂窯では、窖窯末期の三ツ沢窯があるが、現在のところここでは小天目茶碗は見つかっていない。大窯Ⅲ期以後に置かれる上志戸呂窯では、20点近くの陶片（小天目茶碗1～3類）が出土しており、同じ志戸呂窯跡群に包含される神座瓶山窯では3点ほど採集され、いずれも小天目茶碗第3類のものであった。その後築窯される志戸呂・横岡釜谷地区では、これまでのところ、採集されていない。江戸時代前期の遺物の多い釜谷南窯や新兵衛窯、内藤窯では、小碗タイプの陶片が採集されているが、ここにみえてきた、小天目茶碗のタイプはみつからない。しかし、瀬戸窯では、尾呂窯の調査によって、ほぼ17世紀後半代までで存続していることが明らかとなっており、18世紀代には姿を消す^(注16)ことが知られている。したがって、志戸呂窯でも17世紀代に生産していた可能性は極めて高い。

そこで、瀬戸窯における小天目茶碗の器形変化を追ってみることにする。

3. 瀬戸窯における小天目茶碗の変遷

窖窯末期、いわゆる古瀬戸後期の第Ⅱ期^(注17)に天目茶碗の形態に2種類の器形が生まれ、製作され出したところ、小天目茶碗が瀬戸窯の中で製作され出した（典型例として著名な小長曾窯がある）。ほぼ15世紀中葉からはじまり、尾呂窯の盛期まで、2世紀半にわたって生産されたが、以下にその特徴をかいつまんで述べてみよう。

(1) 古瀬戸後期段階（窖窯末期）

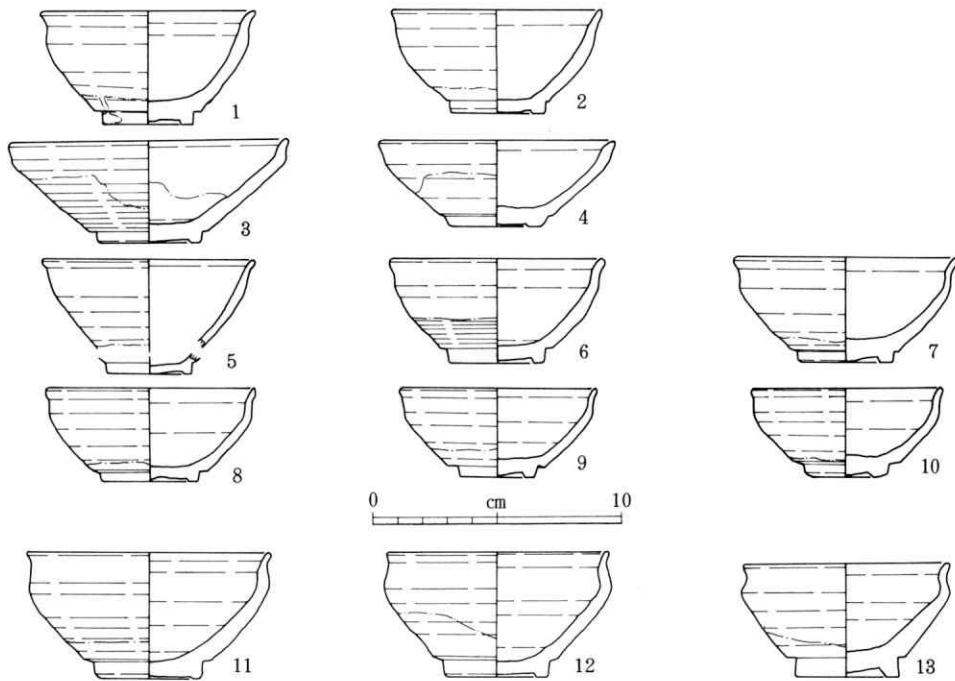
小長曾窯出土例にみるように、すでに一定の規格をもって生まれたようで、大窯Ⅰ期およびⅡ期の時期にみられる大きさとはほぼ同一の製品が誕生している。第2図No.1は、採集品であるが、黒褐色の光沢のある発色を示す小天目茶碗で、全面に薄く錆釉が塗られた上に内面全面と外面胴下半から上部に鉄釉が掛けられている。素地も緻密なもので、球形の、いわゆる天目型を整美に作り出している。口唇部は小さくかつ薄く外反気味に引き上げている。第2図-2も同様な例である。

古瀬戸後期第Ⅲ期（後Ⅲ期という）とされる山口八幡2・3号窯^(注19)や、最初の施釉陶器窯の拡散期にあたり瀬戸市の隣町、藤岡町に築窯された、笹窯^(注20)では、天目茶碗Ⅱ類（口縁部が直立し、器形断面が矩形を呈する形）が明瞭に登場するが、このⅡ類の形状に酷似した小天目茶碗が作られている（第2図3・4）。こうした器形が作られるのは、この時期のみである。おそらく、天目茶碗Ⅰ類が存在することから小長曾窯で出現した小天目茶碗の形態は、この期にも存在し、製作されたと思われるが、Ⅱ類の形態を模倣した扁平な小天目茶碗が多く製作されたようで、山口八幡2号窯、笹窯ともに、口径のやや大きな扁平な小天目茶碗が目立つ。

窖窯最末期の古瀬戸後期第Ⅳ期（後Ⅳ期）の標式窯である菊畑窯^(注21)では、小天目茶碗の例が発見されていないが、鉄釉掛けの台付小杯（仏餉具）が数例出土している。これは、平碗型の小杯と托が一緒になって同一個体に作りあげられているものだが、用途としては、小天目茶碗と同じように特殊な喫茶具ないし仏餉具として製作されたものではないかと推定される。中に口縁部を天目型のように屈曲させるものがあり、胴下半の屈曲も小天目茶碗型に作るものがある。こうした例から類推して、菊畑窯段階には、再び小長曾窯の時期と同様の天目茶碗Ⅰ類の器形に類する小天目茶碗が製作されていたものと推定される。

(2) 大窯期段階

大窯Ⅰ期に編年される小金山窯^(注22)では、第2図5にみるように、球形に脹らむ胴部に、逆「八」の字に



第2図 瀬戸窯およびその周辺窯出土 小天目茶碗

- (1. 小長曾窯表採資料。 2. 同左注4文献より。 3. 山口八幡2号窯注17文献より。
 4. 笹窯注17文献より。 5. 小金山窯注3文献より。 6,7. 昔田窯注3文献より。
 8~10. 月山窯注3文献より。 11~13. 尾呂窯注5文献より。)

外反する口縁を付し、口唇部を玉縁状に作る小天目茶碗が明瞭に復活している。やや薄手の器壁に輪高台を削り出している。大きさも小長曾窯でみられたものと同大で、やや下胴部の張りが小さくなっているのが目をひく。

大窯Ⅰ期後半ないしⅡ期に属する昔田窯では、第2図6・7にみるように、小金山窯にみた口縁部のくびれ状況をさらに大きくした小天目茶碗(注23)が作られている。この時期には、天目茶碗Ⅱ類のタイプがかなり製作されているが、小天目茶碗には、この天目茶碗Ⅱ類を模したタイプは、現在のところ、みられない。

大窯Ⅲ期の天目茶碗を量産した月山窯では第2図8~10にみるように、大きさとしては高台径に若干の差があるものの、目立った違いを示さない。しかし、胴上半部から口唇部に至る造作に2種類ほどのタイプがある。No.8は、彎曲する胴部を直立気味に立て、すぐに外反する口縁部へと移るタイプで、逆「八」の字形に口唇部を作り、外表面を玉縁状に脹らませている。もう一つのタイプは、No.9、10で胴部の彎曲がやや直線的になり、口縁部へ移る直立部分を少し巾広にとり、その後外反する口縁部へ移るタイプで、口唇部は先尖りで逆「八」の字形に開く。後者のタイプは、段状を呈する位置が胴中央へ下がり気味のものもあるが、上志戸呂窯でみた小天目茶碗第3類ほどの段が下位に付されたタイプにまではいっていない。

(3) 登窯期以後

瀬戸窯ではその後、瀬戸山離散現象が起こり、窯の火が一時的に消えるが、17世紀に入ると、大窯形態をとりつつも窯業を復活させる。また一方で、連房式登窯が採用され、量産がはかれる。問題にしている小天目茶碗は、やや時代が下がるが17世紀後半代の連房式登窯である尾呂窯の発掘調査

で出土したものが知られている。ところで天目茶碗Ⅱ類のタイプは、17世紀前半代に一端なくなり、天目茶碗Ⅰ類と同化してほぼ単一の器種となっていったようで、口唇部の形態に若干の差をみせる程度となる。すなわち、胴上部が一度内傾し、再び外反気味となる口縁を作るもので、胴上半が段をなす器形のもの一種となるのであるが、その口唇部が、逆「八」の字形に少し外反するものと、外反する際丸味をもって彎曲気味のものとの2つの種類となり、Ⅰ、Ⅱ類の形態分類は不可能となる。小天目茶碗にもその傾向があらわれているようで、後出の尾呂窯出土の小天目茶碗のうち第2図12は、口唇部が逆「八」の字に外反するタイプであり、第2図13は、口縁部が内傾（大きく屈曲する）して後、丸みをもって彎曲気味に外反する口唇部へ至るタイプのものである。この二種は小天目茶碗における時間差ととらえられるようで、第2図12から13へという器形変化があったとみられる。さらに、第2図11は、その前段のより古い器形を残すものとみられ、内彎する部分が極端な段をなす彎曲気味で、その後逆「八」の字形に外反する口縁となっている。このタイプは時間差があるが上志戸呂窯第3類の如き形態の系譜を引き継ぐものと思われる。

なお、天目茶碗Ⅱ類は、17世紀後半になって、極度に角ばった器形となって瀬戸窯北部の窯に登場し、17世紀いっぱい続くようであるが、小天目茶碗にこの器形が反映されることはなかった。

以上、みてきたように、瀬戸窯では古瀬戸後期Ⅱ期の一時期を除いて、ほぼ天目茶碗Ⅰ類を小型化した器形として小天目茶碗が製作され、2世紀半にわたって数量的には少量ながらほぼ絶えることなく生産され続けてきた。この事実からみて、おそらく瀬戸窯の陶工との技術交流の強い志戸呂窯にお

No	窯名	所在地	法量			釉薬	高台	時期
			口径	高さ	底径			
1	小長曾窯	瀬戸市	8.6	4.5	3.6	鉄+錆	a 削り	(後期Ⅱ) 15c前半
2	〃	〃	8.4	4.0	3.7	鉄	a 〃	〃
3	山口八幡2号窯	〃	11.1	4.1	4.1	鉄	a 〃	(後期Ⅲ) 15c中葉
4	笹窯	藤岡町	9.4	3.5	3.6	鉄	a 〃	〃
5	小金山窯	瀬戸市	8.6	—	3.4	鉄+錆	a 〃	(大窯Ⅰ) 15c末~16c初
6	昔田窯	〃	8.2	4.1	3.8	鉄+錆	a 〃	(大窯Ⅱ) 16c前半
7	〃	〃	8.6	4.2	3.7	鉄+錆	a 〃	〃
8	月山窯	〃	8.4	3.7	3.8	鉄	a 〃	(大窯Ⅲ) 16c後半
9	〃	〃	7.8	3.6	2.9	鉄+錆	a 〃	〃
10	〃	〃	7.6	3.5	3.3	鉄	a 〃	〃
11	尾呂窯	〃	9.6	5.1	4.1	鉄	a 〃	登窯Ⅳ 17c後半
12	〃	〃	8.8	5.0	4.0	鉄	a 〃	登窯Ⅳ 17c後半
13	〃	〃	8.1	4.6	4.1	鉄	a 〃	登窯Ⅳ 〃

番号は、第2図に一致する。
 (No.1は筆者採集資料、No.2は注4文献、No.3、4は注17文献)
 (No.5、6~10は注3文献、No.11~13は注5文献による。)

いても17世紀後半代まで、継続して生産されていたものと推定されるわけである。

なお、瀬戸窯の窖窯、大窯の時期の天目茶碗、小天目茶碗には器全体（高台裏も含めて）に錆釉が塗られているものが窯単位で約半数の率で認められる（昔田窯の場合はすべてに塗られている）。上志戸呂窯の場合、今のところ天目茶碗には認められないが、小天目茶碗第2類に若干それが認められるのは、錆釉が意識的なものであること

表2 瀬戸窯出土の15~17世紀小天目茶碗計測表

を示しているようで、天目茶碗の器肌が全体に茶褐色ないし暗褐色を呈し、それに光沢をもった黒釉ないし黒褐色の釉薬がかぶさっていたものであり、それに近づけるための錆釉であったと思われる。

さて、上志戸呂窯の小天目茶碗の整理を通して、瀬戸窯の小天目茶碗の変化とその比較をして来た。その結果、天目茶碗の生産と縁が深く、しかも天目茶碗Ⅰ類の形態のミニチュアを一貫してとり続けていたことが明らかとなった。そして、それは、17世紀末には、姿を消していったものであったと思われるのである。

そして、志戸呂窯においても同様の時期までの生産があったと考えられるわけであるが一体、この小天目茶碗は、何に使われたのであろうか。以下に若干の考察を述べてみたい。

4. 小天目茶碗の用途

天目茶碗が日本における喫茶の風習と切っても切れないものであることは、歴史の示すところであるが、しかし、室町時代から江戸時代までの間の舶載、国産の天目茶碗の使用方法は時代とともに変化し、その移り変わりも激しかった。すでに中国製の天目茶碗は12世紀末頃には日本に入ってきていたといわれるが、実際に喫茶の風習の広まりと共に禅寺で使用され出すのは、栄西帰国後の臨済禅の普及の中でのこと(注25)で、13世紀の前半のこととみられる。薬用効果を利して禅寺での睡魔退散、茶=葉の施しという慈善救済から社会教化をはかる律宗寺院の動き、仏前供茶等々の喫茶から徐々に一般飲用として喫茶の風習が広まっていく中で、14世紀に入ると瀬戸窯での天目茶碗の模倣が始まっていった。鎌倉時代末期から南北朝には、「茶寄合」が群飲伏遊の一つになり、建武式目でその規制を求めているほどであった(注27)（建武3年—1336年）。こうした茶寄合や闘茶会では、天目を天目台に乗せて湯瓶で茶をたてるという禅宗寺院で鎌倉中ごろに規定された茶礼の儀式に沿って行われていた。現在も京都・建仁寺で行われている開山栄西の生誕法要の後半に一般参会者に公開している「四頭茶会」がこれにあたるという(注28)。禅院の茶礼が武家・公家社会へ広がっていくわけである。こうして需要の拡大していった天目茶碗は、必然的に国産品の製作を進めることとなっていった。15世紀の中ごろには、軽業師が天目と石を大道芸でお手だまの道具にしたとか、15世紀末には古建蓋（建窯産天目）に対し新建蓋の語があり、瀬戸窯産天目がかなり流通し出していることを物語る日記類の記録がある(注29)。

16世紀に入ると草庵の茶湯・佗び茶への発展という茶湯の変化の中で、書院飾り、座敷飾りに用いられた唐物道具は、茶湯の最高級品として格式をもったものとされ、将軍家から大名家へ、格式ある茶道具として伝来され受け継がれた。そうした中で模倣品としての瀬戸天目も新たに見直され価値感を与えられるのであるが、それが白天目であり、茶会記に登場する瀬戸天目であった。こうして国産天目もまた殿中の茶湯、さらに慣習としての茶礼をもつ禅宗寺院での必需品として生産されていった。そうした中でも、戦国大名の中での使用例は目を引くものがあるが、これは『喫茶養生記』にいう『栄西在唐（宋）のむかし、茶を貴重すること眼のごときを見る。種々の語ありて、つぶさに注することあたわず。忠臣に給い、高僧に施す』の意味する茶の側面に、貴重な茶を忠臣・高僧にふるまうという権力者の茶湯があることを物語っているのであろう(注30)。

しかし、利休の「佗び茶」の追求は、朝鮮茶碗、楽茶碗への傾倒となり、高級品としての天目茶碗は、大名茶の湯の中で生きていくが、極めて限定されたものとなり、17世紀に入って小堀遠州らの大名家での茶道具、さらには、禅宗寺院での仏事供養、茶礼として受け継がれ、国産天目の生産は徐々に減少していくこととなった。

こうした中で、小天目茶碗は、どのようなところで使用されたのであろうか。中国産の小天目茶碗として著名なものは、堺の豪商で茶人の津田宗及が所持し、その子で大徳寺156世、龍光院の開祖江月宗玩を経て龍光院に伝わった、重要文化財・油滴天目（磁州窯系）や藤田美術館に所蔵されている同系の油滴天目で、前者が口径9.0cm、器高4.6cm、高台径3.5cm、後者が、口径9.7cm、器高4.6cm、高台径3.2cmである。これらには、ともに黒漆菊唐草螺鈿天目台（前者は、高5.7cm、羽直径12.1cm；後者は高8.7cm、羽直径13.0cm—内側は朱漆；龍光院のものは羽＝茶碗を受ける酸漿はつすきの下の手をあてるところ＝が稜花形になっている）が付属品として伴っている。舶載の油滴天目なるが由か、同じく舶載の黒漆螺鈿天目台（注31）が伴っているのである。天目台は15～16世紀代の舶載品で、高台裏に天字形と分銅形の沈金銘のある龍光院のものは、通常の大きさの油滴天目に付属する黒漆螺鈿天目台の高台裏にある沈金銘と同じで、製作銘の入った大小の天目台が彼地で作られ、舶載されたことを物語っている。それらは、おそらく將軍家ないし禪院へもたらされたもので、やがて戦国大名、豪商の手を経て現在に伝世されたと考えられよう。

このように、小天目茶碗も天目台に乗せて使用されたという例（小天目茶碗が類品の少ない貴重な油滴天目であるという事由が優先されているのかも知れないが）から類推して、国産の小天目茶碗もまた、大名茶、禪院の茶礼等の喫茶具、法要具として使用されたものと考えられよう。特に16世紀代には、中国国内での建窯をはじめとする天目茶碗生産地の衰退が著しく、国産天目茶碗への期待が高まっていったようで、大窯期にみる天目茶碗生産量はⅡ期、Ⅲ期に最も多くなっていった。小天目茶碗もそうした中で、生産が高まった。特に禅宗寺院と戦国大名との結びつきから、禪院の茶礼が武家の茶湯に広がり、様々な儀礼・法要等に天目茶碗が用いられた。特に禪院での茶礼は、数多くの天目茶碗を必要とし、使用の頻度からその破損率も高かったといわれ、補充に国産天目茶碗の需要も高まったようである。国産の天目茶碗も、実際の飲茶具として使用されるため、破損頻度が高く、補修のうえ、覆輪をうまく使い再使用して、現在にまで伝世されている例も禅宗寺院に多くみられる。しかし小天目茶碗の伝世は建仁寺などに建蓋が伝来しているのが知られるのみで、さほど多くはない。天目茶碗100に対し、小天目茶碗1～2個という生産の量はたしかに需要場面の限定されていたことを物語るが、かなり長期に渡り、さほど大きな器形変化をせず従来どおりの大きさで生産されたことは特異である。そうした背景を考慮にいれば、小天目茶碗の使用は、おそらく禪院での恒常的な供献具として、供養茶器としての使用が多く、直接喫茶ということは少なかったものと推定される。

以上、小天目茶碗を、上志戸呂窯出土品の整理を手がかりに、瀬戸・美濃窯産と比較し、その変遷、用途などについて、若干考察してみた。この整理の過程で、当館所蔵資料の志戸呂天目茶碗および瀬戸・美濃鉄釉天目茶碗と、これに付属する朱漆雲文天目台（内黒漆）を観察、一部を図化した。すでに一部の資料については、志戸呂天目茶碗の分析の際、関連資料として、述べたところであるが、ここに、付記事項としてその概要を記すこととする。（注33）

（付）館蔵大徳寺什器の天目茶碗と天目台

当館が所蔵する大徳寺什器の伝承をもつ天目茶碗と天目台は、その中心を17世紀中葉頃におき、ほぼ17世紀代のものばかりという、江戸時代前期に時代を限定できる資料で、そのうちのいくつかには、高台裏に墨書ないし漆書銘が存在し、そのもとの所属場所を類推できるものがある。また、天目台も同様、朱漆書銘があって、同様の推定が可能である。

今、これらの墨書、漆書銘を手がかりにこの天目茶碗と天目台の旧所属場所、時代等について考察してみる。

1. 資料の内容

(1) 天目茶碗

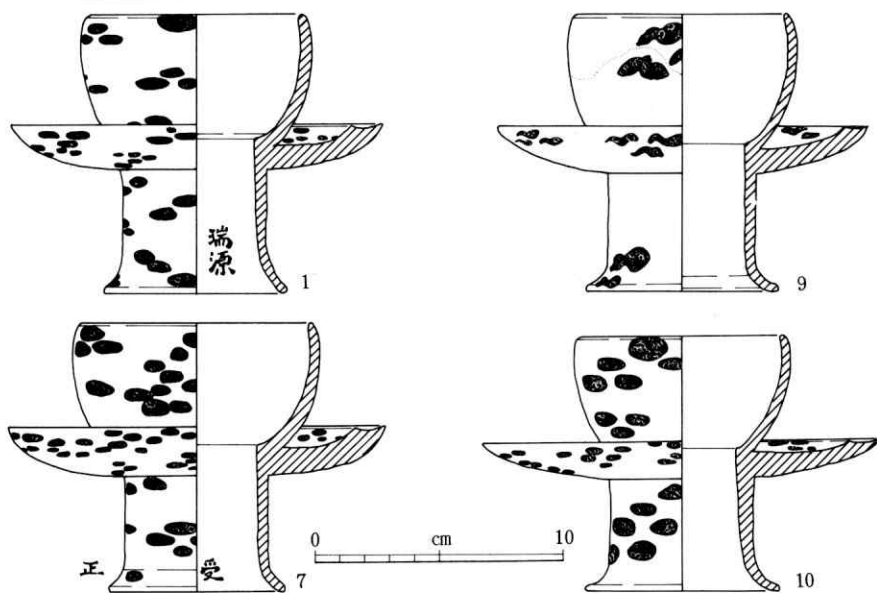
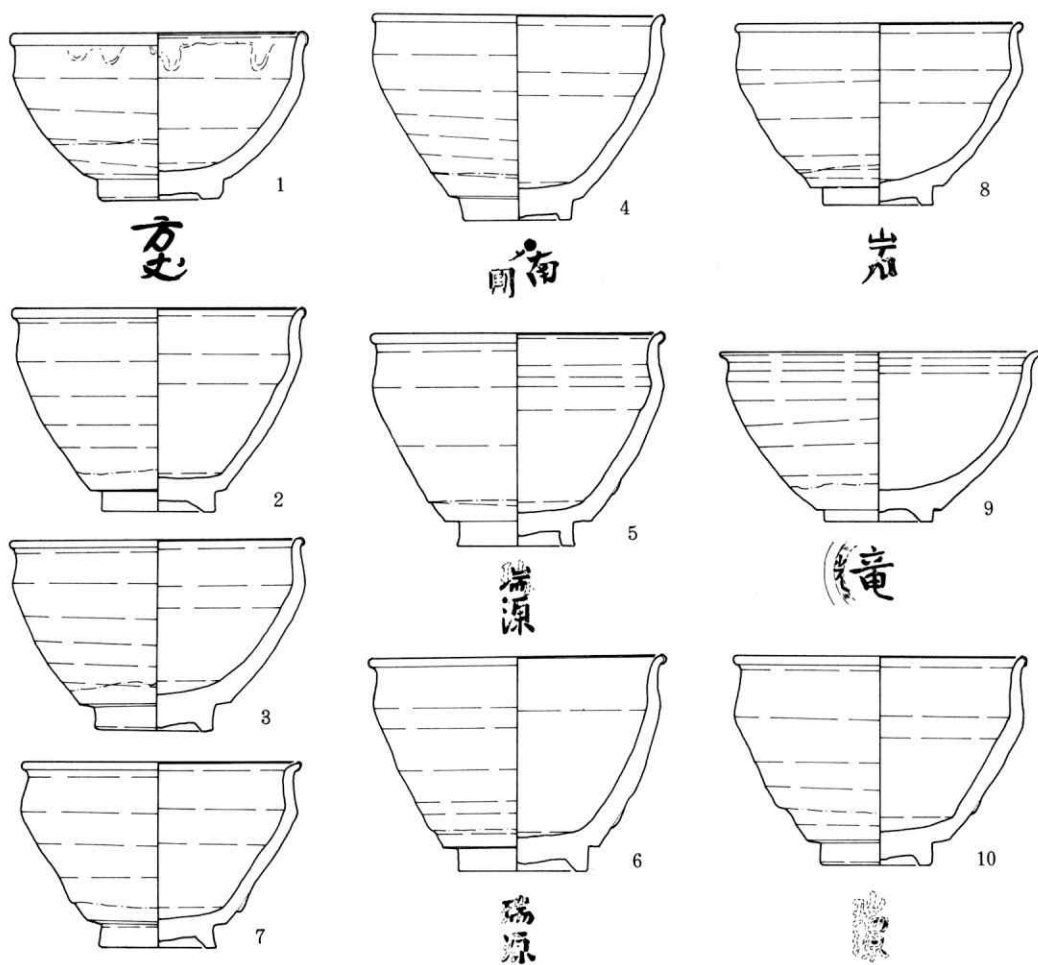
9点の天目茶碗と10点の天目台が上下二箱の桐の収納箱に納まっているが、箱自体は明治以降の調製とみられ、「大徳寺天目及茶碗 拾人前」の覆い紙が付く。収納箱側面には、ラベルがあり、次のように記述されている（実際は縦書きであるが、構成上横書きとした）。

第六十四号	印
天目盃	八個
瑞源朱漆銘	黒釉
瑞源黒漆銘	飴色
瑞源黒漆銘	黒褐釉
南圓銘	
岩 銘	
無 銘	黒釉
全	黒褐釉
全	黒褐釉
臺	拾壹個
瑞源銘	五個
正受銘	貳個
別 作	貳個
後 作	壹個
正受銘黒無地	壹個

以上貳箱入

この二箱は、縦×横×深さが各々48.4cm、51.2cm、12.7cmのもので、それぞれ内部が上・中・下3列に仕切られ上列は天目茶碗4個用、中・下列はこれを3個ずつ計6個の椀目に仕切って天目台用としており、もとは合計8個の天目茶碗、12個の天目台が収納されていたものと判断される。しかしラベル貼付時には、天目台1個がすでに亡失していて、空椀となり、天目盃8個、臺11個の記述となったと思われる。

現在の収納されている状況は、上段箱の天目茶碗4個を収納すべき上列に、天目茶碗3個を入れ、中・下列はもとの天目台6個が入る。下段箱は、天目茶碗の収納する上列に4個の天目茶碗、6個の天目台の納まる中・下列には、2個の天目茶碗と4個の天目台が収納されている。ももとの天目茶碗8個は、高台裏にある墨書や漆書から表3にあるNo.1とNo.9の2点を除く8点で、残りのこのNo.1、9の2点は、収納箱調製後ラベル貼付時まで亡失した天目台1個分と、その後亡失した天目台があった模様で、その1個分の計2個の穴埋めにするるとともに、10人分の天目茶碗と天目台が揃うことにしたものである。したがって、収納箱覆い紙に書かれた内容すなわち、「大徳寺天目及茶碗



第3図 大徳寺什器の天目茶碗と天目台 (天目茶碗は表3の番号に一致。天目台は、表4の番号に一致)

10人前」は、什物番号とみられる第68号なるラベルの貼付された時期より後の時点ということになる。後述するようにそれは、大徳寺塔頭のどこかで什物として保管、使用されていたものが、市中に流れて以後、愛好家の手を経る中で10人前となったものと考えられる。

さて、ここでみられる天目茶碗は、禅宗寺院に伝世する数茶碗としての天目茶碗の典型を示していると思われるので、それを概観してみることにする。

(No.1) 柿釉調に発色した器面の上部に黒斑状の釉だれが内外面に見られるもので、美濃窯大窯Ⅴ期と考えられる。全体に球形状を呈し、口縁形態は、垂直に近く引きあげられている。胎土は白色で砂質性の強いやや粗質なもので、美濃窯に多い素地である。高さの低い形態のものである。

高台内に「方丈」の墨書銘がある。筆跡は他の天目茶碗にみられるものとは異なり単独である。この方丈は、以下に登場する瑞源院、龍光院、正受院等、大徳寺塔頭の各院内に所在する方丈とみられる場合と、大徳寺本坊に属する方丈とみられる場合とがあるが登場する墨書に塔頭名が多いことから、この方丈は、後者とみられる。

現・方丈は、『龍寶山大徳禅寺世譜』(以下『世譜』と略す)によれば、開山大燈国師が紫野に14世紀前半頃創建した時から焼亡を繰り返し、寛永13年(1636年)に改築された建物である。^(注34)

(No.2～3) 長胴なタイプ为天目茶碗で、口縁部が内彎気味に内傾し、口唇部がわずかに外反するものである。

高台裏には、墨書はない。黒色から黒褐色釉の鉄釉がかかり、No.3は禾目風の黄褐色の釉ダレが内面に出ている。1か所ひび割れが大きく入る。高台は、断面が台形状の削り高台である。

No.2、3とも登窯Ⅱ期(本業2期)^(注35)に属し17世紀第2四半期に位置付けられる。

(No.4～6) 黒褐色の斑状になった鉄釉が掛かった細長いタイプの胴に段をもつ天目茶碗で、No.4は垂直気味に立った口縁からわずかに外反する口唇部へと移る。次のNo.5、6に比べ段から上部の内傾が少ない。

高台内に「南圓？」ないし「南ノ間？」と読める墨書がある。高台の削りはやや浅く、1～2mm程度である。胎土は堅い感じのものである。

墨書の意味するところは不明であるが、塔頭の一つの寺院名かと思われる。ちなみに玉林院の中には、「南明庵」という堂が存する。

No.5、6は、ともに光沢のある黒褐色に発色した鉄釉で、No.5は全体に茶褐色の禾目風の縦縞文様が入る。細長いタイプ为天目茶碗で、直線的な胴部から段をなして内傾する口縁となり、口唇部は大きく外反させている。No.6は、内傾度はやや緩慢で、釉調に褐色部分が多く、「飴色」とラベルに云うものがこれにあたる。共に「瑞源」の文字が黒漆で高台内底裏に書かれている。この漆書は、部分的に剝離しているが、同一人物によって書かれたものようで、筆跡がよく似ている。この「瑞源」は、大徳寺准塔頭で「瑞源院」にあたる。『世譜』によれば、この瑞源院は、北派独住で「開祖 勅諭大鑑印宗禅師安室宗閑和尚(大徳寺176世、1590～1647)。寛永元年(1624)甲子檀越福山侯水野日向守源勝成、父・和泉守忠重ノ為ニ、大光院ノ西ニ於テ創建ス。忠重ノ法号ヲ以テ院名トス。江月(宗)玩和尚ヲ請イ祖ト為ス。玩公、安室(宗)閑ヲ之ニ付シ、塔頭ニ列ス。然レドモ、元和ノ公許寺領定メノ後(ノ建立)ヲ以テ、故ニ納税無シ。元禄年中、水野氏、禄ヲ減ジ、

塔頭ヲ辞スコトト為ス。法系統カズ……云々。」とあって、寛永元年の創建以後、元禄の頃までは塔頭に列していたが、その後、准塔頭に格下げしている。明治初年まで断続的ながら存続するが、明治初年の廃仏棄積運動の中で、廃絶した。孤篷庵の東、紫野高校の敷地となった現在地には、「瑞源院跡」の文字を右に、「大光院跡」の文字を左に刻んだ石碑が建てられている。

No.4～6の3点は、登窯Ⅲ期（本業3期）の17世紀中葉から後半に位置付けられる。^(注36)

(No.7、8) No.5、6よりやや背が低く、段が大きく内傾して作られているタイプの日目茶碗で、口唇部は丸く、しかも大きく外反させて作られている。共に口縁部が割れていて、漆を用いて接合補修がされている。No.8は、大きく胴部にまでひび割れが入っている。全体に光沢のある黒色の発色をみせる鉄釉で、No.7には茶褐色の禾目風の縦縞文様が入る。

高台内の底裏に墨書があり、No.7は○印のような記号状のものが、No.8は「岩」の文字が書かれている。「岩」は、大徳寺の准塔頭で「梅巖庵」の略字として書かれた可能性がある。『世譜』によれば、現存の三玄院の山内の左に寛永年中に建立された見性庵（北派輪住）の傘下に属した「梅巖庵」は、北派輪住の准塔頭で「開祖 特賜佛海祖燈禪師天祐紹杲和尚（大徳寺169世1586～1666）。寛永二十年癸未、友松宗祐が父・梅巖紹薫ノ為ニ、寸松庵ノ西ニ之ヲ建テル……見性庵派ト謂フ」ものであった。この建物も廃仏棄積で廃絶した。

2点ともに登窯Ⅳ期（本業4期）に属し17世紀後半の生産にみられる。^(注37)

(No.9) もともとの組み合わせの中にはなかった日目茶碗で、志戸呂窯製のものである。斑状にはなっているが、茶褐色の鉄釉が刷け塗りで掛けられたことによく判る資料である。口唇部が、小さく2か所ほど欠けているが、漆で補修されている。No.1～No.8の日目茶碗には、すべて真鍮製の覆輪が掛けられていて、接合補修の上を覆輪で保護した形となっているのに対し、このNo.9に覆輪はなく、補修部分がむき出しとなっている。この日目茶碗は、球形に近い胴部に、小さくくの字に屈曲する口縁部を付けた比較的古い様相を示す形態のものである。江戸期の志戸呂窯で出土している他の日目茶碗と瀬戸・美濃窯出土日目茶碗との類似性から、この資料は、登窯Ⅲ期（本業3期）併行期とした見解をすでに述べたが、他の8点の資料の検討^(注38)（注37で述べているようにA～Dタイプの把握についてやや時代を下げるべき要素が多いため、今回各タイプを時代順に記述し、前回の時期編年を訂正した。）によって、登窯Ⅲ期以降Ⅳ期までの時期、すなわち、17世紀後半代のもものと改めたい。

なお、京都・龍光院所蔵の志戸呂日目はその口縁形態からみて、ほぼ登窯Ⅲ期へ置いてよいものと考えられる。しかし口径13.0cmと大型なため、瀬戸・美濃窯製品と若干異なる。この登窯Ⅲ期以降の日目茶碗の器形は、志戸呂窯独自の展開を示すのかも知れない。^(注39)

さて、このNo.9の高台内、底裏から高台脇にかけて墨書されている「龍光」の文字は大徳寺塔頭「龍光院」を指していると考えられる。前述の龍光院所蔵の志戸呂日目の底裏には、「龍」の墨書があって、明らかに龍光院の所有品であることを記している墨書であることが判る。したがって、No.9の「龍光」もまた、かつて龍光院所有物であったことを物語っている。『世譜』によれば「龍光院北派輪住。開祖特賜大梁興宗禪師江月宗玩和尚（大徳寺156世1574～1643）。檀越ハ黒田筑前守源長政。父・如水孝高ノ為ニ玉林院ノ南ニ之ヲ創建ス。而シテ墳ヲ造ル慶長十一年丙子也。

……庭石小堀遠州ノ好ミニテ、中ニ朝鮮石燈籠有リ。此ノ下ニ一院六庵ヲ出ス。瑞源院、看松庵、寸松、孤篷、正宗、慈眼、小舎。……之ヲ龍光院派ト云ウ。」とあって、瑞源院、孤篷庵などと深い関係のある塔頭寺院であることが判る。

(No.10) 最後の1点は、個人蔵のもので、館藏品ではない。しかし、この高台内・底裏には「瑞源」の漆書銘があり、大半が剝離している。わずかに残る色は黒のようでもありくすんだ朱のようでもある。最初に述べたラベルの中の天目盃八個のうち瑞源朱漆銘黒釉がこれにあたるものと思われる。

光沢のある黒色に発色した鉄釉が掛かり口唇部は釉層が薄く褐色釉になっている。口縁部に割れ傷があり、漆で接合補修しているが、全体を真鍮覆輪で覆っているため傷は目立たない。

収納箱にいう瑞源朱漆銘・黒釉がこのNo.10にあたり、瑞源黒漆銘・銜色はNo.6、瑞源黒漆銘・黒褐釉がNo.5、南圓銘はNo.4、岩銘はNo.8、無銘黒釉はNo.2、同黒褐釉2点はNo.3とNo.7と考えられ、No.1およびNo.9はもとはこの収納箱になく、その後10人前に調製する際に追加されたものであることが判る。

それぞれの天目茶碗の大きさは表3のとおりである。

No	釉調	銘	法量 cm				覆輪	高台	備考	台帳番号
			高さ	口径	胴径	底径				
1	茶褐(柿)	方丈	6.7	12.0	11.8	4.8	真鍮	直立、輪、巾広	墨書銘	No.476
2	黒(漆黒)	無	8.1	11.8	11.5	4.7	〃	直立、内反り気味、台形		No.470
3	黒褐	無	7.6	11.7	11.9	4.7	〃	外反り気味、輪、台形		No.475
4	黒褐	南圓(?)	8.2	11.5	11.7	4.3	〃	直立、輪、方形	墨書銘	No.477
5	黒褐	瑞源	8.4	11.8	11.7	4.6	〃	直立、輪、方形	黒漆銘	No.478
6	黒褐(銜)	瑞源	8.5	11.7	11.5	5.1	〃	直立、輪、台形	黒漆銘	No.474
7	黒～黒褐	(無)丸印	7.4	11.1	11.1	4.6	〃	外開き、輪、台形	墨書で記号	No.472
8	黒	岩	7.3	11.3	11.5	4.4	〃	直立、輪、台形	墨書銘	No.469
9	黄褐～茶褐	竜光	6.8	12.7	12.2	4.3	無	直立、内反り気味、台形	墨書銘	No.471
10	黒	瑞源	8.4	11.7	11.6	4.4	真鍮	直立、輪、台形	漆書銘(朱?)	

表3 大徳寺什器・天目茶碗計測表

(2) 天目台

合計10脚の天目台は、大部分が木地に内面を黒漆で、外面は赤褐色の朱漆で塗った溜塗漆器で、外面には黒漆で雲文散らしの文様が入っている。

器高が9.7cmから11.5cmまでであるが、11.0cm前後が最も多く、酸漿(茶碗受け部)、土居(高台・脚)が薄く、羽(縁)部分がやや厚めに作られているほか、土居の高さが4.5～5.0cmと腰高な点の特徴としてあげられる。

天目台は、著名な天目茶碗の付属品として唐物の伝世品が多く知られているが、時代とともに土居部分が高くなる傾向を示している。「数の台」とも呼ばれる「尼崎台」や、朱漆青漆天目台の「若狭台」は、伝世された舶載の天目茶碗の受け台として茶碗とセットで伝来している15～16世紀代のもので、高さ6.4cm、6.3cm、羽の直径16.0cm、16.7cmとほぼ均一な大きさをもつ。これらは土居の

高さが 1.8 cm～2.0 cm と低いもので、時代の特徴を表わしている。このことは、同じく伝世されている龍光院の油滴天目（小天目）付属の菊唐草螺鈿稜花天目台（16世紀代、琉球産とみる意見が有力だが、唐物（元～明）で15世紀代とみる見方もある）が、高さ 6.2 cm、羽の直径 13.2 cm で、土居の高さは 1.6 cm 前後と低いことが共通する。これが国産の天目台で蒔絵の施されたものが出現する17世紀には、高さ 9.8 cm、羽の直径 14.2 cm、土居の高さ 4.4 cm と高台の高くなるものになり、高台は、円筒状で下端が屈曲気味に外開きになる形態となる。本例の天目台も大半がこの形をとっている。

2. 使用場所の推定

さて、収納箱に掲げられている天目台は11個であるが、現在は、10個存在するのみで1個が亡失している。掲載内容からみて、亡失しているのは、「正受銘・黒無地壺個」である。実は、この天目台は、簡易な御物袋に収納されているが、この仕覆がわりの袋の緒に名札が付けられていて、それぞれ、使用者名（法要の際の）が記されているのである。今これを整理してみると、表4の如くである。これは、質のよい天目台から順に遠州茶道宗家々元代々の名になっていて、小堀遠州から始まって、遠州流茶道にかかせない遠州の第3子、第4子の2人を加え、9代までの11人が記されていたと判断される。6代大膳亮政寿（号一宗延）の名が見あらず、これが亡失している「正受銘・黒無地」の天目台であったと思われる。これを概略してみると、初代宗甫、2代宗慶、その弟権十郎蓬雪、同じく弟政貴、3代宗実の5人に「瑞源」銘天目台、4、5代に「正受」銘天目台、7、8代に「別作式個」の天目台、9代宗本に「後作壺個」の天目台があてられていて、6代宗延を加えて、遠州流歴代家元の法要に使用する天目台をあらかじめ決めていたものと考えられる。これに天目茶碗をどのように組み合わせさせていたのかは、天目茶碗に添っている御物袋に名札がないため、不明であるが、前項でみた「瑞源」漆書銘のものを始めとするNo.1、No.9を除く8個の天目茶碗が「瑞源」「正受」銘のある天目台と組み合わせさせていた可能性が高い。残り3個の天目台には、別に保管されていたと想像される天目茶碗が使用されたのであろう。そして、それらは、別に収納箱があり、天目茶碗が4個単位ないし、2箱分の8個単位で保管され、四頭茶会など所蔵していた禅宗寺院の主要な行事にも使用されていたと考えられる。すなわち、遠州流家元の法要行事に使用する天目茶碗、天目台はあらかじめ定め

No.	漆銘等	名札記載事項	法 量		備 考（歴代の生没年）	台帳番号
			高 さ	羽の直径		
1	瑞 源（朱）	「瑞源五個内」「宗甫遠州侯」	11.2	15.0	初代 遠州 (1579～1647)	No.485
2	〃 〃	「瑞源五個内」「大膳宗慶侯」	10.6	15.0	二代(遠州嫡子) 政之 (1620～1670)	No.482
3	〃 〃	「瑞源五個内」「権十郎蓬雪侯」	10.6	15.0	遠州第3子 政尹 (1625～1694)	No.483
4	〃 〃	「瑞源五個内」「十左衛門政貴侯」	10.7	15.0	遠州第4子 政孝 (1639～1704)	No.478
5	〃 〃	「瑞源五個内」「正恒侯」	10.2	15.2	三代 宗実 (1649～1694)	No.486
6	正・受（朱）	「正受式個内」「政房侯」	10.8	15.2	四代 宗瑞 (1685～1713)	No.481
7	〃 〃	「正受式個内」「政峰侯」	10.8	15.2	五代 宗香 (1690～1760)	No.479
8	無	「別作式個内」「宗友侯」	9.7	15.0	七代 (政方) (1743～1803)	No.480
9	〃	「別作式個内」「宗中侯」	11.1	14.9	八代 (政優) (1786～1867)	No.484
10	〃	「後作壺個」「宗本侯」	10.2	16.0	九代 (正和) (1812～1864)	No.487

表4 天目台の名札と大きさ

られていて、同時に寺院の主要行事にも使用されていたもので、天目茶碗の方は、使用頻度から破損したり、類似の形が多いため、特定することが困難となり、名札貼付を止めてしまったと思われる。その後、寺院から市中愛好家の手へ渡る段階に収納箱の亡失したりした空欄へももとはなかった天目茶碗が加わったのであろう。それはおそらく8代宗中（9代ののちに逝去）の死後で10代宗有の存命中（1867年～1909年）のことであったと推定される。あるいは瑞源院廃絶（明治初年）ののち、しばらくの間、遠州流ゆかりの寺院で使用され、その後市中へ出たものかも知れない。いずれにしても明治末年には、大徳寺関係から離れたものと思われる。

漆器の塗は、大部分朱漆に内面を黒漆としたものだが、^(注42)外面の朱漆は溜塗で光沢をもつ。このうち、別作2個の1つは、黒漆のややセピアがかった上に黒色の雲文状の斑点を散らす。またもう一つの別作は、金箔を押しつけた黒漆塗とみられ、金箔の剝離が著しい。No.10は、くすんだ朱漆で、簡単な木地整形の上に荒い刷毛で塗っており、漆膜も薄く、さらに黒漆の雲文も雑に描いている。僧侶によって足らなくなったものの補充として簡単に作られたものであることを物語っている。

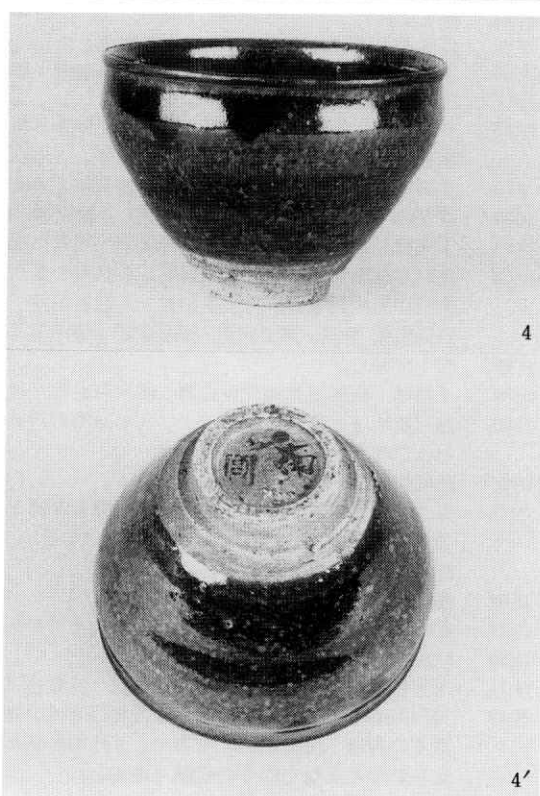
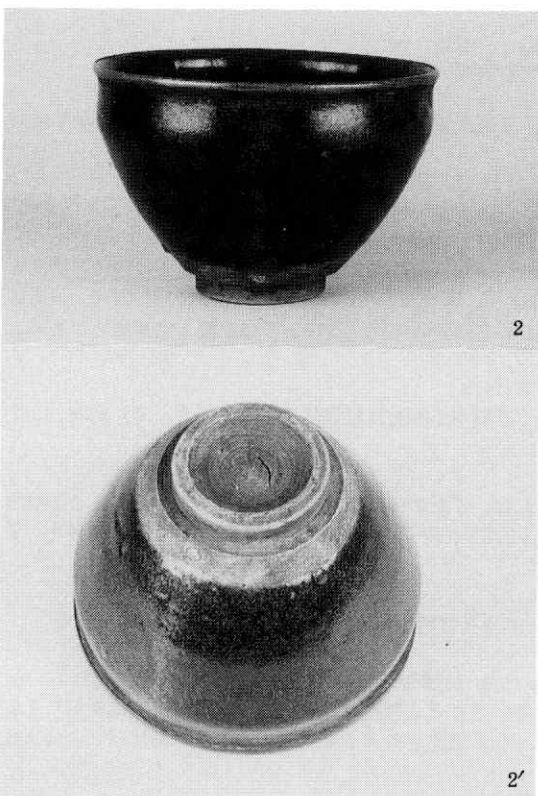
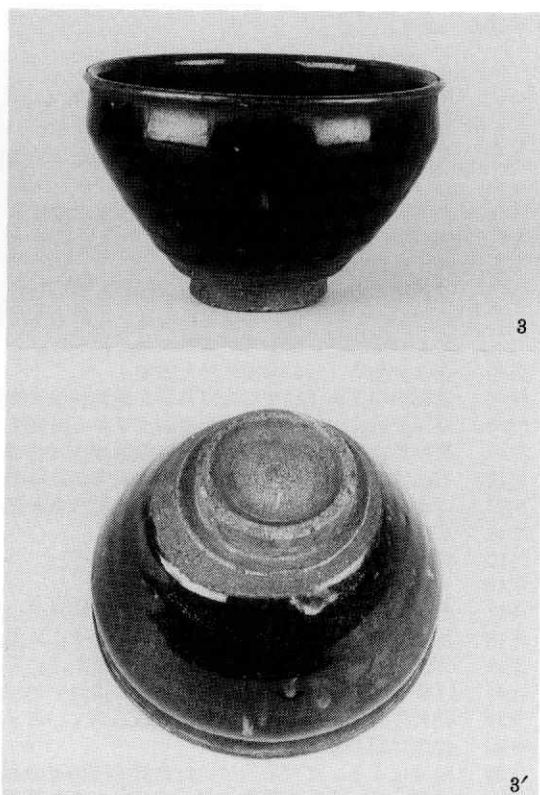
ところで、朱漆銘の「瑞源」「正受」は何を語っているのだろうか。すでに天目茶碗の項で見たように、「瑞源」は准塔頭の「瑞源院」であり、廃仏棄釈運動の際廃絶した寺院であるが、廃絶前かその直後に、その什器であった天目茶碗、天目台が関連寺院に移ったとみられるものである。もとは、大徳寺本坊ないし付属建物での儀式や法要に際し出されたものかあるいは、本院である龍光院へ同じく儀式や法要に際し使用すべく出されていたものかも知れない。やがて遠州流ゆかりの寺院へ移ったのであろう。「正受」は、現存する大徳寺塔頭の「正受院」のことである。『世譜』によれば、「正受院 南派独住。開祖勅諭廣徳正宗禪師清庵宗胃和尚(大徳寺93世1484～1562)。天文年中創建。檀越勢州関氏。爾後、蜂屋出羽守、軒ヲ改メ院ト作シ(もと正受軒か)、殿宇一新ス。慶長年間、関一政、旧因ヲ以テ改修ス。……南英(宗)頓(115世)、……太素(宗)謁(125世)……、東嶺(宗)陽(151世)、天叔(宗)眼(129世)ヲ法嗣……、笑堂(宗)闇(179世)、藍溪(宗)瑛(152世)ヲ嗣シ之ニ住ス。爾後、大慈院ノ下ト為ル。……」とあって、17世紀代には、大徳寺塔頭の中でも有力な寺院であったようである。しかし江戸期後半以後はさほどではなかったようで、大慈院傘下に属していた。そうした環境の中で天目台は、遠州ゆかりの龍光院など西部地域の寺院での法要、儀礼の割当などで正受院から出たもので、その後、正受院へ帰ることなく市井の愛好家の中へ流通していったものと思われる。

「瑞源」「正受」とも傷みがところどころにあるが、簡単な漆補修を加えて現在へ伝えられた。また後補のある別作2個は、内面がややセピア色した黒漆で、外面は金粉に梨子地漆を塗り梨子地としたもので、透明感が失われつつある。No.8の方は傷がひどく雲文散らしの黒漆がかなり剝離しているが、ともに製作時が「瑞源」「正受」と同時期であることを器形と文様は物語っている。おそらく17世紀代のものとみられる。後作壱個は、亡失したものを再現したもので、寺院内僧侶の手作りとみられ、漆塗が雑に仕上げられている。おそらく、明治初年、8、9代の逝去時期に急拠作成されたものであろう。

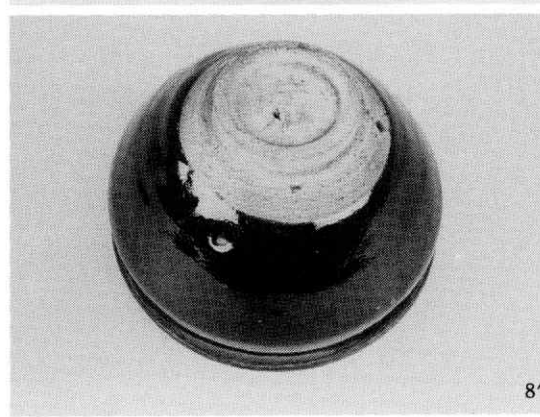
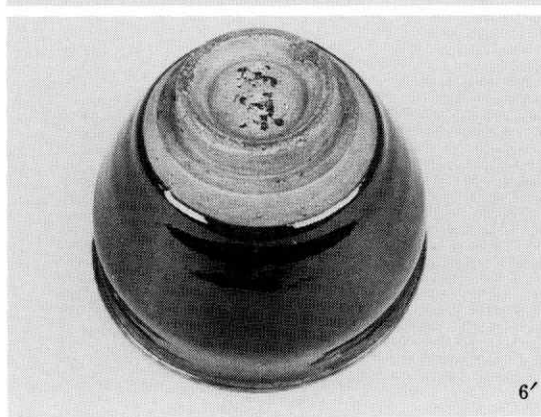
以上、志戸呂窯製天目茶碗の検討から、天目茶碗と天目台がセットとなった10人組みの資料に検討を加えることになったが、はからずも、天目茶碗が茶道家元の法要茶事などに使われたものであることが判明してきた。数茶碗の性格の強い瀬戸・美濃産と志戸呂窯産の天目茶碗の17世紀代の製品ではあるが、これらが今に伝世される背景には、禅宗寺院でのさまざまな形での茶礼、法要等の中で天目

茶碗が一定の役割をもった道具であることを物語っているものといえよう。

- 注1 拙稿「志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について」『愛知県陶磁資料館研究紀要10』1991
- 注2 美濃古窯研究会編『美濃の古陶』光琳社出版 1976
- 注3 藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』1986
- 注4 宮石宗弘『瀬戸市史陶磁史篇二』瀬戸市 1981 (陶窯の変遷;小長曾窯)
- 注5 榑崎彰一ほか『尾呂一愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』瀬戸市教育委員会 1990
- 注6 注1に同じ。
- 注7 『静岡県金谷町 上志戸呂古窯跡発掘調査報告』金谷町教育委員会 1991
この報告の中では、小天目茶碗は、小碗の中に包括していて、小碗(灰釉)22点中小天目灰釉が1点、同じく鉄釉28点、中小天目鉄釉が18点である。
- 注8 注3文献中「月山窯発掘調査概要」
- 注9 若尾正成ほか『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会 1987
- 注10 注1文献において、古瀬戸後期後半から出現する天目茶碗の2つのタイプをそれぞれI・II類とした。
- 注11 栗原雅也ほか『初山焼釜下古窯発掘調査報告書』静岡県引佐郡細江町教育委員会 1985
- 注12 初山宝林寺にて出土、1988年愛知県陶磁資料館企画展「静岡のやきもの」に出陳。
- 注13 『企画展 静岡のやきもの』図録 愛知県陶磁資料館 1988年 出陳№13の中央手前。
- 注14 注1に同じ。
- 注15 注2および注3に同じ。
- 注16 注5に同じ。
- 注17 藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991
- 注18 注4および注17。注17では後I期の後半には出現していたとしている。
- 注19 『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅳ』愛知県教育委員会 1985 および注17
- 注20 『笹窯発掘調査報告』藤岡町教育委員会 1983
- 注21 注17文献。注19にも実測図が掲載されている。
- 注22 注3に同じ。
- 注23 注3による。ただし注17では審窯末期のものが混在しているとした注3から後Ⅳ期のものを抽出してまとめている。小天目茶碗は後Ⅳ期(新)とされているが、ここでは大窯Ⅱ期が妥当と考える。
- 注24 注5に同じ。
- 注25 藤岡了一「宋の天目茶碗」『世界陶磁全集12(宋)』小学館 1977
- 注26 佐藤豊三「天目と茶」『天目』徳川美術館・根津美術館編(展覧会図録) 1979
- 注27 注26に同じ。
- 注28 伊藤東慎「四頭茶会—その由来と作法のあらまし」『茶道雑誌』56-3 1992。なお、高橋茂氏からは、四頭茶会に関して多くの御教示を得た。
- 注29 注26による。『蔭涼軒日録』延徳2年(1490)2月20日の条
- 注30 高野澄『栄西』(京都・宗祖の旅) 淡交社 1990
- 注31 『天目』徳川美術館・根津美術館編 展覧会図録 1979 出陳番号50、51付属品。
- 注32 注31文献出陳番号5、15付属品。これらを元~明(14~15世紀)代とする考え(『茶の湯の漆器—唐物』開館10周年記念春季特別展図録 茶道資料館 1989)と、琉球漆器(『東洋の漆工芸』特別展図録 東京国立博物館 1977, 荒川浩和・徳川義宜『琉球漆工芸』日本経済新聞社 1978)で16世紀とする考えがある。
- 注33 注1に同じ。
- 注34 『増補 龍寶山大徳禅寺世譜 付索引』思文閣出版 1979
- 注35 藤沢良祐「本業焼の研究(1)」、「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ、Ⅶ』1987、1988
および注2、注5。
- 注36 注35に同じ。
- 注37 注1ではこの資料をBグループとし登窯Ⅲ期としたが、Ⅳ期の特徴とすべきであることから、ここで登窯Ⅳ期と訂正する。(登窯Ⅲ期としたC(2点)、D(8点)グループに、時間差があり、それぞれ登窯Ⅱ、Ⅲ期にあたることの分析不足による。)
- 注38 注1に同じ。
- 注39 小山富士夫『天目』陶磁大系88 平凡社 1974。グラビア図版136
- 注40 注32に同じ。
- 注41 『天目』徳川美術館・根津美術館編 展覧会図録 1979 出陳番号131
- 注42 遠州茶道宗家歴代家元を記した名札が9代で終わっていること、当初11個あった天目台のうち亡失した1個はその内容(正受銘)からみて、6代の名札があったと推定されること、市中へ出た段階には10人前に整えられたことなどからの推測である。



館蔵天目茶碗とその高台(2) (番号は表3と一致)

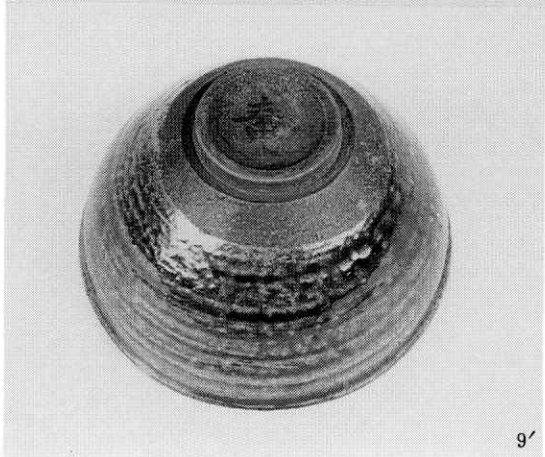




9



10



9'



10'



台 1



台 9



台 7



台 10